NEWSLETTER
S O S H O T S U J I N
vol.5

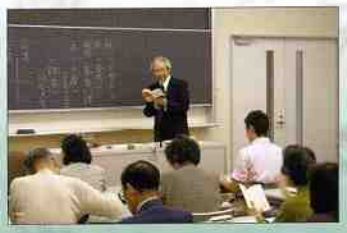
雙松通訊

二松學舍大學

21世紀COEプログラム
「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

平成17年度活動報告

今西学長　COEプログラムの「なかじきり」を前にして
高山拠点リーダー　二年間の活動を終えて（中間報告）



平成17年度班活動報告

シンポジウム・講習会・公開講座

研究レポート

目次

平成17年度活動報告

1 ＣＯＥプログラムの「なかじきり」を前にして
COEプログラム代表（学長）　今西 幹一

2 二年間の活動を終えて（中間報告）
拠点リーダー　高山 節也

平成17年度班活動報告

3 上古・中古日本漢文班
4 中世日本漢文班
5 近世・近代日本漢文班
6 朝鮮漢学班
7 漢文教育班
8 日本漢字音・辞書・字書班
9 日中文化交流班
10 書誌学・目録データ班

シンポジウム・講習会・公開講座

11 シンポジウム『論語』の開催
事業推進担当者　竹下 悦子

12 「訓点資料解読講習会」報告
事業推進担当者　白藤 禮幸

13 COEプログラム公開講座に参加して
COE研究助手　川邉 雄大

研究レポート

14 王古魯の日本漢学研究
COE海外拠点リーダー　王 宝平

15 「日本における仏典の伝入と出版に関する研究」
COE研究員　會谷 佳光

16 伊藤忠岱（鹿里）旧蔵漢学資料の整理と研究
COE研究員　清水 信子

17 上代の一次資料における用字法と文体の調査と考察
COE研究員　金子 正孝

18 『佛乘禪師東歸集』の基礎的研究
COE研究員　根木 優

19 活動・会議一覧

20 ●シンポジウム等開催　●現地調査
●諸会議　●公開講座

21 和刻本古文真宝書影集5
編集後記

COEプログラムの「なかじきり」を前にして

COEプログラム代表（学長）　今西 幹一

平成17年度活動報告

平成16年度に始まった本学のCOEプログラムもいよいよ3年目を迎えた。今年度は中間評価を受けることになる。いうならば「なかじきり」であるが、単なる通過点ではなく、進捗度の途中評価でもなく、課題である「日本漢文学の世界的拠点の構築」について、一定の成果の達成が求められている。前年度の中間評価において1、2の大学が厳しい評価を受けていたが、本学の場合は体制を整え、事業を進捗させていることから、そうした面からの懸念はないものと確信する。

初年度（平成16年度）は、プログラムへの取り組みの体制の整備、資料収集を主に、テーブルスピーチや講演会等の恒常的な活動を軌道に載せることが計られて来た。学内専任教員及び外国（海外拠点）を含む学外からの担当者・協力者、若手研究者による研究員、助手等40名を超える陣容を擁し、こぢんまりとした大学としては精一杯の体制を組み得たものと思われる。推進委員会（本部）のもと三つの委員会（実施・事業推進・編集）、八つの研究班がそれぞれに活動計画を建てプログラムの推進にあたっている。また研究員は、個別に日本漢文学研究のテーマをもち研究に従事している。ニューズレター『雙松通訊』の発刊もなされ、今号に至る号を重ねている。また、学外研究機関との提携も図られ、初年度としては順調な歩み出しであったかと思う。

2年目（平成17年度）は、従来からの基礎的な作業、定例的な活動に加えて、本プログラムの活動の外部への公開、公表に入り得た年度である。平成17年9月の3日・4日の2日に亙って、プログラム標題の「日本漢文学の世界的拠点の構築」の国際シンポジウムを開催した。海外拠点の研究協力者を中心に、講演、あるいは公開討論を通して、日本漢文学研究、漢字文化研究の現状と課題を探り当てることのできた有意義な事業であったと思う。また、研究成果の文書としての定着、公表を図る研究機関誌『日本漢文学研究』を創刊した。また別途に、11月に本プログラムに呼応する形で、大学主催による「シンポジウム論語」が催され、講演と公開討論による論語の教育、社会倫理の面でのその意義を再確認を為し得た。前文部科学大臣中山成彬氏の特別講演を初め、財界・学界・評論界から論語に関心の深い論客を集めた公開討論等で、世の耳目を集め得たものと思われる。また研究班単位毎に、資料を主にその研究テーマに沿った研究成果が、冊子となって逐次公刊されている。

本プログラムにあたっては、4本の柱が建てられている。そのうちの、①日本漢文学に関する文献の所在の確認と網羅、そしてそのデータベース化、②日本漢文学に関わる研究者の連携化（ネットワーク作り）の2項は自助努力により達成が可能であるし、ここまで順調に進展して来ているものとすることが出来る。③漢文訓読技能の向上については、本プログラムにおいて良質の漢文教科書の作成が図られているが、教育界、殊に国語教育の分野での漢文教育、中国古典教育の位置づけの回復など教育行政面での後押しが必要である。④次代の漢文学・日本漢文学を担う若手研究者の養成も本プログラムの担う重要な責務であるが、研究員等若手の学徒が、プログラムに沿って自前の研究テーマを持ち研究に勤しんでいるので、学位の取得、研究の成果の公刊もそう遠くない時期になされるであろう。更に彼らがなろうことなら日本漢文学の研究の普遍普及のために、内外各所に地位を得て欲しいものである。

3年目（平成18年度）は、従前の事業、企画を継続発展させていくとともに、2年後の集約をも考慮していかなくてはならない。今年度の国際シンポジウムは、9月に中国の地で開催の運びになっている。会場の浙江工商大学は、本学の提携大学であり、さま変わりはしているものの漢字の本拠中国での開催は、大きな意味をもち、成果もそれに相応すると期待される。

いずれにしても中間評価まで、日は少ない。本学のこれまでの取組が高い評価を得、プログラムの完遂までの更なる事業の発展を願うものである。研究班の研究の進展によって拡張しても拡散せず、機構的に噛み合って、一丸的にプログラムが推進して行くことが望しい。拠点リーダーを初め関係各位のこれまでの労を多とし、プログラム遂行のための一層のご尽力を願うものである。

二年間の活動を終えて（中間報告）

拠点リーダー　高山 節也

平成17年度活動報告

平成16年後期から本格的活動に入った二松学舎大学21世紀COEプログラムも、いよいよ中間評価を控えて総括報告するべき時期となった。先般『雙松通訊』4号で中間報告をしているが、その後の成果も含め、中間評価報告書の骨子に沿って、原点に帰りつつ簡略に報告する。

1. 本プログラムの趣旨

本プログラムにおいては、日本漢文学を研究対象とするものの、そこで扱われる文献は漢詩文に限定されるものではなく、日本独自の訓読法を基礎とする漢字漢文文献全般と、それらを媒体とする学問のすべてを対象としている。ここに本プログラムの特異性や革新性の基礎があるのであるが、このことはさらに日本文学研究の一部門としての漢文学から、総合的視野における日本学研究として把握し、さらに中国学・朝鮮学との関連から、日本漢文学研究の学際的・国際的研究体制の構築を目指すことになる。

その実現の方法として、本プログラムでは4本の柱となる計画を中心に、それを有機的に結合させるべく多様な研究班活動を配置した。

2. 4本の柱

①**日本漢文学関連データベースの構築**　入力機構の構築は16年度末には終了し、これを公開するための準備を進め、17年度末において日本漢文関連文献書誌所在資料として、各地の収蔵機関の目録より転記した書誌項目約4万件の入力を終えた。ただこれは全体に息の長い仕事で、現時点での入力済み対象機関は日本全国レベルで考えれば、北海道・東北および一部のその他地域にすぎず、また入力項目についても固有名詞のふりがなや書籍の分類項目など、改訂・改善作業が平行して行われている。そのほかデータ関係としては、日本漢文関連論文データの作成や日本漢文関連文献書名データの作成などを現在も進めている。

②**日本漢文学研究者の世界的ネットワーク**　国際的なシンポジウム（16年度　東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来　17年度　世界における日本漢文学研究の現状と課題）や関連研究者の招聘による講演会・テーブルスピーチ（中国・韓国・台湾・ベトナム・タイ・アメリカ・オランダ・ベルギー）が開催され、そこで得られた情報によって、さらにヨーロッパにおけるEAJRSへの参加（スウェーデン・ルンド）や、中国における中文文献資源共建共享合作会議（南京）・北京論壇2005（北京）への参加、あるいは台湾中華仏学研究所（台北）へ研究員の派遣など、機関としても人材としても貴重な関係ネットワークが着実に成立しつつあるといえよう。

③**人材育成**　COEプログラムの主要な目標である若手研究者の育成について、本プログラムの取り組みとしては、まず大学院教育との連携を達成したことが挙げられる。日本漢文関係講座へのCOEの参入と単位の取得システムの構築、これは前後期それぞれ集中講義2科目「漢字の文化史」「江戸の版本」および一般講座2科目「漢籍書誌学」「古文書解読」として参入した。そのほかに一般集中講座として「江戸の漢詩」「漢字表記論」の2講座、文献資料書誌技能者養成講座としてやはり前後期それぞれ3講座ずつ、文献関係の多様な講座を開設した。今後は大学院講座への参入をさらに増加させ、海外研究者による講座担当なども視野にいれた計画を立てる予定である。

④**漢文教育**　現在における学生の漢文ばなれと訓読力の低下について、大学向けの新しい漢文テキストの編集を目指した。現時点では、大学における基礎漢文講座用のテキストとして、版本印面や各種書体など興味の間口を広くしたもの、朝鮮の漢文資料を充実させたもの、また邦人の漢詩や漢文を重点的に扱ったものなど、新機軸をうちだした試行テキストが刊行されている。これらを引き続き大学の総合講座授業で実際にテキストとして教授し、その効果や改善点を検討することとしている。

3. 成果の刊行

各班における研究成果については、各班の総括を参照されたい。ただ明確な成果としての論文集や報告書あるいは資料集などについては、以下のとおり刊行している。

『日本漢文学研究』創刊号
『ニューズレター雙松通訊』1号～4号
『'04公開講演会報告書』
『'05国際シンポジウム報告書』
『藤原通憲資料集』
『本邦における支那学の発達』（翻刻補訂版）
『漢文文法と訓読処理』
『雅楽資料集』（論考編）
『雅楽資料集』（資料編）
『声明資料集』
『江戸漢学書目』
『江戸明治漢詩文書目』
『三島中洲研究』
『二松漢文　日本漢詩』（テキスト）
『二松漢文　日本漢文』（テキスト）
『基礎漢文（思想編）』（テキスト）
『基礎漢文（漢詩編）』（テキスト）

上古・中古日本漢文班

主　任：白藤 禮幸
担当者：山崎 正伸　吉原 浩人　谷本 玲大
協力者：河野 貴美子

平成17年度班活動報告

上古・中古班は、上代語を専門とする白藤、中古韻文学を専門とする山崎・谷本、中古漢文を専門とする吉原・河野がそれぞれ研究活動を展開しているが、それぞれの部分を全体との関係で位置付ける努力も同時に行われている。白藤は、前年に引き続き、中世以前の漢字文献のリスト作成作業を継続した。続群書類従・国史大系・古典文庫・日本古典全集などから約1000タイトルを加えた。これからの課題としては、日本史関係の史料大成・大日本古記録などの叢書の調査がある。もう一つの作業は、訓点資料に基づいた訓読文文献のリスト化である。昨年のシンポジウムで、外国からの日本に対する要望の一に読み下し文資料の提供があった。その要望を実現するためには、その文献の一覧の作成が便利である。訓点語学での訓読文は、主として日本語の歴史的研究のために利用されるものであるが、漢文訓読を、日本人の中国文化理解の一つの姿・方法と位置付ければ訓読文の時代的変化は、言語史上の変化であると同時に中国思想や仏教経典の理解の仕方の変化でも有り得よう。この作業は、『国語年鑑』に基づいておこなったが、これからは、当文献を実検し、訓読文を持つものか、単なる解題的研究論文か、を確認する作業が残っている。また、単行の訓点語研究書に当たって、そこに収載されている訓読文を調査することも残っている。　（白藤）

山崎・谷本班は、昨年に引き続き『新撰万葉集』を研究した。本書の諸本対照校本作成に際して、流布本系統に属し、近親関係にあるとされる京都大学本、天理大学図書館本、大阪市立大学本の三本間の相互関係の検討は欠かせない。京都大学本は既に浅見徹氏の解題を付し、京都大学国語国文資料叢書の第十三巻として臨川書店より影印が刊行されているが、その影印本で確認すると、原本には朱によると思われる書き入れ並びに句点、更にヲコト点らしき点が微かに認められる。しかし、先行研究では、これらについて言及・考察しているものがない。よって、本年度は、原本について調査し、その実態を検証した。今回の京都大学への調査申し込みには浅見徹氏の紹介状を賜って実現した。その結果、天理本に近似する朱によるヲコト点や句点のあることが確認された。詳細については今後、分析していく予定である。また、情報公開の観点から、家蔵する版本のいくつかについて、電子画像化を進めた。これについては谷本の管理・保有するホームページスペース（http://www.tanimoto.to/）へ平成18年度中に掲載予定である。　（谷本）

吉原・河野班は、「大江匡房・永観――文人と僧侶の院政期漢文学――」と題し、大江匡房（1041～1111）及び永観（1032～1111）の著作に、日本漢文学の知見を生かした注釈をつけ、研究を公刊することをめざしている。また、河野は「南都寺院における漢籍・辞書受容の研究」をテーマとして研究を進めている。この目的のため、17年12月に吉原・河野、18年2月に吉原が、諸本調査を高野山大学図書館・東大寺図書館・興福寺・薬師寺等で行なった。また、『往生講式』『三時念仏観門式』の校訂本文作成と注釈を、8名の研究者・大学院生とともに行い、平成18年4月中に報告書『永観講式訳注』を刊行する予定である。

この期に吉原・河野は以下の論文を公刊した。

―吉原―

○「善光寺参り―『とはずがたり』・道行き・参籠―」『国文学解釈と鑑賞』70巻5号、至文堂、2005、5

○㷀惑星の歌―『聖徳太子伝暦』九歳条をめぐる言説の背景と展開」、「福井文雅博士古稀記念論集　アジア文化の思想と儀礼」、春秋社、2005、6

○「北陸道から信濃へ―尭恵『善光寺紀行』」、『国文学解釈と鑑賞』71巻3号、至文堂2006、3

○「大江匡房『秋深夜漏闌詩序』考」、『アジア遊学』別冊3「日本・中国交流の諸相」、勉誠出版、2006、3

○「大江匡房『秋深夜漏闌詩序』訳注」、『東洋の思想と宗教』23号、早稲田大学東洋哲学会、2006、3

―河野―

○「平安末期における善珠撰述仏典注釈書の継承」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』51輯、2006、2

○「興福寺蔵『因明義断』裏書にみえる古辞書類の引用について」、『日本漢文学研究』1号、2006、3

○「古代日本の仏典注釈書における漢籍の引用―善珠撰『因明論疏明灯抄』の反切注記を中心に―」、『アジア遊学』別冊3、勉誠出版、2006、3　（吉原）

中世日本漢文班

主　任：磯 水絵
担当者：田中 幸江
協力者：福島 和夫　新井 弘順　小川 剛生　高橋 秀城　ニールス グュルベルク　楊 桂香

平成17年度班活動報告

本年度の中世日本漢文班の活動は、4月の説話文学会例会に幕を開けた。前年度に作成した「藤原通憲資料集」を元に、本班担当者田中幸江、協力者福島和夫、および本学大学院前期課程修了者神田邦彦による研究発表と講演が行われたことは既報のとおりであるが、なお、そのまとめは平成18年度の「説話文学研究」に掲載される予定となっている。ところで、その資料集の経験を承けて、次に計画したのが、「日本漢文資料　楽書篇」の作成であった。その概要については、これまでにも折に触れて紹介してきたが、結果としては、第4号の本誌に報告したものより、規模は少しく縮小されることとなった。それは共同研究、共同作業の性質上、止むを得ないところであり、積み残したものは来年度以降に、仕上げていきたいと考えている。それでも、協力者や内外の大学院生、若手研究者に支えられ、新しい分野でありながら、ここまでの成果が短期間に得られたことは喜ばしいかぎりである。また、上野学園日本音楽資料室の雅楽、声明関係史料の目録は、今後の研究場面に寄与するに違いない。

以下にその「日本漢文資料」3冊の内容を記し、この報告にかえる。

第1冊　日本漢文資料 楽書篇「雅楽資料集」

《論考篇》
緒言　磯　水絵
藤原宗輔年譜考　小川剛生
『山槐記』に見る音楽　磯　水絵
　附載　『山槐記』音楽記事年表
　　『山槐記』音楽記事年表　簡易索引
『玉葉』にみる九条兼実の琵琶
　―『文机談』御師争い逸話の史実考証を通じて―　櫻井利佳
　附載　『玉葉』音楽記事年表
『台記』音楽記事年表　廣瀬千晃
『水左記』音楽記事年表　芝田泰典
『胡琴教録』真名本について　付翻刻・校異　神田邦彦
　附載　『胡琴教録』諸本解題目録稿
　　『胡琴教録』研究文献目録
東儀鉄笛著『楽道偉人伝』翻刻・校異　滝沢友子・下浅千穂・芝田泰典
　附載　東儀鉄笛著『楽道偉人伝』について　滝沢友子
　　『楽道偉人伝』人名索引　滝沢友子

第2冊　日本漢文資料 楽書篇「雅楽資料集」

《資料篇》
緒言　福島和夫
上野学園日本音楽資料室史料目録　神田邦彦編
　1.雅楽関係史料目録
　　雅楽関係史料　楽歳堂旧蔵楽書類
　　円満院門跡旧蔵楽書類　窪家旧蔵楽書類　山田孝雄博士収集「體源抄」写本類　久迩宮家旧蔵雅楽器付属楽譜類　史料名索引　岸川佳恵編
『教訓抄』編年年表　磯水絵・田中幸江・神田邦彦・川野辺綾子編
正・続群書類従管絃部索引稿〈事項編〉　櫻井利佳編
　〈人名編〉　磯水絵研究室編
日本古典全集『続教訓抄』人名索引 稿　神田邦彦・川野辺綾子・岸川佳恵編

第3冊　日本漢文資料 楽書篇「声明資料集」

《論考篇》
上野学園日本音楽資料室について　福島和夫
上野学園日本音楽資料室架蔵の声明史料について　新井弘順
講式とは何か　ニールス・グュルベルク
『二尊講略式』について
　―慧仁（仁空実導）二尊信仰の一齣―　高橋秀城
《資料篇》
伽陀集（翻刻）　福島和夫・田中幸江
　神奈川県立金沢文庫蔵『〔聖宣本伽陀集〕』
　　『諸経要文伽陀集』
　　『〔舎利講伽陀　第二日〕』
　　『〔舎利講伽陀集〕』
　大原勝林院蔵・覚秀集・魚山叢書
　　眼之笥（甲）第二『伽陀集』
　　舌之笥 第六十八『伽陀集』『伽陀口伝』『手本伽陀』二点
　　第六十九『伽陀集』
　　第七十　『伽陀集』
講式翻刻・注釈
　『大黒講式』注釈　ニールス・グュルベルク
　『二尊講略式』翻刻・注釈　高橋秀城

関係史料翻刻・解題
東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』翻刻・解題　高橋秀城
《解題目録篇》
別置文庫 金田一春彦博士収集声明史料について　福島和夫
『四座講式の研究』と金田一春彦博士により収集された講式資料　ニールス・グュルベルク
上野学園日本音楽資料室史料目録
　声明史料目録
　　講式関係史料（別置・金田一春彦博士収集声明史料を含む）　田中幸江編
　　講式関係史料目録
　　講式関係史料一覧
　　講式関係史料解題目録（稿）
　講式各段式文初句並びに伽陀各句一覧表　高橋秀城・田中幸江
講式について　福島和夫
四座講式の江戸期版行の諸本について　福島和夫
　（上野学園日本音楽資料室特別展観目録より再録）
四座講式寛永版・同覆刻版について　福島和夫
《伽陀索引》
伽陀集所収伽陀索引　田中幸江編

近世・近代日本漢文班

主　任：町 泉寿郎
担当者：横須賀 司久　大島 晃　揖斐 高　山辺 進
協力者：ロバートキャンベル　長尾 直茂

平成17年度班活動報告

「和刻本漢籍の祖本・漢籍の考訂校勘・江戸前期の漢籍注釈に関する研究」
「日本近代における漢学・漢文学―幕末明治・大正昭和」
「漢方医書に関する文献研究―日本医譜ほか」
「日本漢学者伝記情報に関する研究」

以上の課題に関しては、個々の研究論文執筆や資料公開、資料調査・収集を進めており、現時点で研究テーマを継続するもの、新しい課題への移行を構想しつつあるものがある。17年度中に発表した研究は前号に報告したごとくであり、18年度の計画は次号掲載の予定であるので、ここでは17年度末に刊行した研究成果報告書にしぼって記す。

「日本漢文学史テキスト作成:倉石武四郎講義ノートの整理刊行」

本プログラムの構想段階、また採択後の推進過程でしばしば問題になる「日本漢文学」の定義をめぐって、ある学問領域を示すにはその学問の沿革を提示するのが一番であるとの考えから、本課題に着手した。その材料を標記に求めた理由は、新たに編纂するには時間的制約と関連研究領域の博大化・細分化からみて相当に困難であり、昭和初期までに刊行された通史の類は必ずしも本プログラムの趣旨に適当しない。故倉石武四郎（1897～1975）の講義ノート「本邦における支那学の発達」（1946年度東大所講）は、（中国学から見た日本漢文学通史という点で）類書がまれで、かつ語学・文献学・自然科学・藝術等への配慮がみられる点でも、本プログラムの趣旨にかなう内容と考えられたからである。

大島晃・河野貴美子・佐藤進・佐藤保・清水信子・戸川芳郎・長尾直茂・町泉寿郎によって、稿本整理のための研究会を13回（16年度5回、17年度前期8回）、補注作成のための研究会を24回（17年度前期9回、後期15回）にわたって実施した。講義ノートは全体で13章からなる。今回、新たに以下に掲げる章題を付した。

1:大陸文化の受容
2:平安期の中国学藝の受容
3:博士家の学問と訓法の発達
4:遣唐使廃止後・鎌倉と日宋交流
5:宋学新注と五山文学、書物の印刷
6:惺窩新注学、羅山点と闇斎点
7:仁斎と徂徠
8:七経孟子攷文・護園学派、唐話学と長崎通事
9:江戸期学藝のひろがり、白話小説・戯曲
10:幕末明治の漢詩文と学藝
11:漢学・東洋史学
12:京都支那学
13:諸帝大の支那学・東洋史学・支那語学

以上、講義ノート本編が字数にして約120,000字、新たに付した補注が項目数にして約700項目、字数にして約70,000字。戸川による講述者についての紹介と、本講義ノート刊行の経緯の説明（附、倉石「日本漢文学史の諸問題」）、大島による日本漢文学史上の本講義ノートの意義についての解説、を付して全体で約180頁の報告書となった。

「江戸漢学書目・江戸明治漢詩文書目の編纂」

本課題もまた、本プログラムの研究対象の問題と密接なかかわりがある。国書の各分野に、広範囲に分布している（はずの）あらゆる日本漢文を研究対象とする以上、しかも文体別の目録が十全でない以上、医学・天文など個別分野ごとの実地調査は不可避である。その一方で、やはり「日本漢文」の主な対象と言わざるを得ない漢学・漢詩文分野の書籍が、一体何点あるのか、その内訳はいかなるものであるのかという、当該分野の総体を展望することは、どうしても必要な作業であると考えられた。

そこで、江戸期資料に関しては国文学研究資料館で公開中の国書基本データベース（著作編）、明治期資料に関しては国会図書館のデータベース、を利用して漢学書目・漢詩文書目を編纂した。約9,000部の漢学書目については岡野康幸（本プログラム研究助手）が四部分類化作業を行い、約12,000部の漢詩文書目については新井洋子（本学非常勤助手）が刊行年表化した。

現在、国文学研究資料館において「日本古典籍分類概念表の確立と古典籍総合目録データベースにおける分類化促進」の研究プロジェクトが進行中であり、我々は漢文文献に関してこれと協力関係にある。両「書目」の編纂作業は、この日本古典籍のあるべき分類概念の構築に資するものと考えている。

「三島中洲研究」

平成16年6月より三島中洲研究会を再開し、16年度は9回、17年度は10回の月例の研究会を重ねてきた。研究会の趣旨は、三島中洲（およびその周囲の漢学者）の文章の正確な読解と、その事績研究を通した日本近代における漢学・漢学者が担った意義の解明にあり、将来的には三島中洲の年譜と全集の編纂を視野に入れている。今回は2年間に実施した研究会の成果として、狭間直樹氏による特別講演、例会発表の要旨と資料読解の成果たる資料欄をまとめて、報告書「三島中洲研究」とした。

朝鮮漢学班

主　任：小川 晴久
担当者：渡辺 了好
協力者：芹川 哲世

平成17年度班活動報告

1.『韓国漢文学研究』バックナンバーの収集

韓国漢文学研究会はこの分野では韓国で最も権威のある研究団体であり、その機関誌既刊分35冊を揃えることは、日本漢文学研究にとって重要である。本国の出版元でバックナンバーがなくなっている創刊号から16号までを東大教養学部国漢教室所蔵のそれをコピーし製本することは容易ではなかったが、1回の渡韓も介して計画通り実現した。最近個別の大学中心に同種の研究誌が数種類出ていることがわかったので、今後そちらにも目を配る必要がある。

2. 懸吐入りの漢籍（含仏典）の収集

漢訳仏典の世界を漢学（漢文学）に含めることの重要性に気づき、『法華経諺解』『楞厳経（諺解）』『真言勧供・三壇施食文諺解』、研究書としては『李朝仏教』（高橋亨著）を収集した。『論語』『孟子』『書経』の諺解も入手した。また朝鮮漢文読法の研究として『口訣研究』（南豊鉉著、韓国文）を入手した。

3. 朝鮮総督府時代の漢文教科書（コピー）の収集

今年度の活動で一番時間と労力を費やしたのは、この作業であった。韓国2ヶ所（ソウルの国立中央図書館、大田のハンバッ教育博物館）、国内1ヶ所（東京北区の東書文庫）で、研究用として全25冊コピーの形で収集できた。調査の過程で『第二次大戦前・戦時期の日本語教育関係文献目録』（日本語教育史研究会、1993年刊、科研費の報告書）が存在することがわかった。これによると国内では東書文庫のほかに、成城学園教育研究所（すべてコピー）、福岡教育大学図書館、国立教育研究所にもまだ私たちが収集できていない教科書の現物ないしコピーが存在することがわかった。一番多く現物を所蔵しているのは東書文庫であるが、そこでの未コピーのもの11冊を含め、まだ30冊ほど未収集であることがわかった。この文献目録にも記載されていないものも一・二冊今回韓国に出かけて独自に収集できたが、朝鮮総督府発行の漢文教科書の収蔵が一ヶ所に完備していないこと、各機関関係者がご苦労されていることがわかったことも、収穫の一つである。本COEプログラムで、全てコピーであるが、今まで確認されているものだけでも計55冊のコピーを完備し、なお未収録の探求を続けることの意義と責任を感じた。なお本目録によって戦前蒙古連合自治政府民政部が新京で刊行した『高級国民学校用漢文教科書』（第1冊と第3冊）、『国民学校用漢文教科書』（第1冊、第5冊、第7冊）がソウル大学に所蔵されていることがわかり、ソウル滞在中の研究協力者芹川哲世氏にコピーをとっていただいたことも、ご報告しておきたい。いずれにしても1993年に科研費でこのような文献目録が作成されていたこと、並びにこれを紹介して下さった東書文庫の職員の皆さんに深く感謝したい。

また、3月20日から23日までのソウルでの第2回調査で、韓国の精神文化研究院が1994年に『韓国教育史料集成』を刊行しており、教科書篇の10～12巻に朝鮮総督府発行の漢文教科書も収めていることが分かったが、収録されているのは23冊でしかなかった。ダブっていないのは5冊しかなかったが、朝鮮総督府が1911年にいち早く出した『普通学校学徒用漢文読本』全5巻が収録されているのは貴重である。揃いは他のどこにもない。

4. 李退渓の著作の日本所在調査

朝鮮の朱子といわれる李退渓の著作の和刻本の確認調査は先号ですでにご報告した。その後名古屋の蓬左文庫を訪問して、和刻本ではないが、李退渓撰の『理学通録』が所蔵されていることがわかった。これは宋明学案の朝鮮版とも言えるもので、中国の理学者（朱子学者）たちの詳細な伝記と言行録の収集であって、大変詳しいものである。李退渓が朱子の手紙を精読し、『朱子書節要』として整理したことはよく知られているが、李退渓が宋明の理学者たちの事跡を丹念に調査し、その記録を集大成したこと自体驚きである。李退渓自身の著述ではないが、朱子の後学者たちからも学ぼうとした李退渓に改めて尊敬の念を覚えた。李退渓の和刻本の調査だけでなく、李退渓の著作の『理学通録』までが、日本にどのように輸入されていたかに、今後関心を払いたい。

漢文教育班

主　任：吉崎 一衛
担当者：小川 晴久　山辺 進
協力者：石毛 慎一　小金澤 豊

平成17年度班活動報告

1. 漢文教科書の作成

平成18年度から入学してくる学生においては、新指導要領によれば、国語科の学習は、現代文または国語綜合を履修すれば修得ということになる。この新指導要領のもとで学んでくる学生を迎えるにあたって、これまでの既製の教科書を使用しての指導は、内容的にも高度過ぎて指導に困難をきたすであろうということで、漢文を学んでこない学生にも応じた、初歩からの教科書作成に着手し、平成16年度末に完成を見た。これが『二松漢文　基礎漢文―漢詩編―』『二松漢文　基礎漢文―思想編―』の二冊である。

ただ、既製の教科書における問題、ひいては本プログラムで編纂するべき教科書のあり方については、内容の高度さの問題のみではなく、漢字離れした学生にいかに受け入れやすく、しかも興味深く且つこれまでにない掲載文献を選定して本プログラムの特質をいかにアピールするか、等の検討すべき問題はなお残存していた。

これらに対する不断の検討と改善のための作業が17年度なお継続している。後述する教科書編纂の問題点に関するスピーチのような、白熱した論議や、一方で総括班有志による日本漢文や日本漢詩に特化したテキストの編纂も、すべて検討と改善の具体的表れであるといえよう。

カリキュラムへの位置づけは、文学部・国際政治経済学部両学部にわたり、共通に受講できる綜合科目のなかに「基礎漢文」という科目を配することで実現した。この科目の目的は、前述したように漢文に親しんでこなかった学生に、まず漢文訓読のリズム、つまり漢文訓読体になれさせることにある。積極的に朗誦を取り入れるべく配慮したのも、この目的に対応したものである。

2. 明治以降の漢文教科書の収集とデータベースの作成

明治以降の学校教育のなかで、漢文がどのように指導されてきたかを辿ることは、我が国の国語教育の変遷、また今後のそれを考える上で欠くことのできない方法である。そのためにはこれまでの教育を具体的に示している漢文教科書の研究が必要になる。

その初期段階としては、明治以降の教科書を収集し、その教科書に収められている教材をデータベース化して、資料として公開し研究に資するようにすることが必然である。

その作業として、17年度は筑波大学図書館を中心に資料収集を実施した。これにはCOE助手及び筑波大学院生あるいは先方の教授自身の助力を得て、約226点の資料を収集することができた。その後前年度収集の資料にこれらを加えて、書名・出版事項に本文内容を示す目次部分の画像処理を行ったデータを約590点作成した。

これは現在COE事務局PC内に保存されているが、今後はこれらをデータベース上で公開する必要が有ろう。

3. スピーチの開催

17年度においては、漢文教科書編纂のもつ各種の問題点に関するスピーチと、実際に教科書の歴史的変貌に係わる研究についてのスピーチを開催した。

漢文教科書編纂のもつ各種の問題点については、COE顧問を招いてスピーチを行った上で、既製の教科書における問題点や、COE独自のテキスト編纂上の問題点について、白熱した論議が展開した。また教科書の歴史的変貌に係わるスピーチにおいては、研究協力者を招いて「近代漢文教育史の一考察　“忠”“孝”教材を中心として」のテーマで開催した。明治初期から昭和戦前までを、漢文絶対期・漢文譲位期・漢文劣位期・国漢対等期に区分して、これらに儒学継承から国体論の整備・浸透・硬直の様相を織り交ぜた、戦前教育史に占める漢文の役割を鮮明化した発表であり、今後の教育史研究の一つの典型が開示されたといえよう。

日本漢字音・辞書・字書班

主　任：佐藤 進
担当者：白藤 禮幸　谷本 玲大
協力者：大島 正二　小方 伴子

平成17年度班活動報告

当班では,二つの事業を並行して推し進めてきた。ひとつは,漢文文法の体系とそれをいかに訓読してきたかを検討することである。もうひとつは,『類聚名義抄』などに見られるいわゆる古訓がいかなる漢文文脈の中で使われてきたかを検討する作業である。

後者については,『類聚名義抄』から抜粋した親字とその和訓の入力作業がほぼ完了した。その概要は『雙松通訊』6号に詳述するので,ここでは省略する。

前者については,研究報告書を作成し終わったので,以下それについて紹介する。

我々は,楊伯峻《文言文法》(中華書局,1983年版)を邦訳し,ここに採録された例文約780例について訓読と口語訳をあたえ,さらにはその訓読がどういう配慮のもとになされたかを考察し,随所にコラム「訓読処理」をもうけて紹介する研究報告書『漢文文法と訓読処理ー編訳「文言文法」ー』を作成した(A4判268頁)。ここには,『漢文文法と訓読処理』の前書をもとにリライトし,なぜこの本を編訳したかを紹介してみたい。

訓読研究といえば,「訓点語研究」が国語学者によって支えられているところから分るように,訓読法の研究はすぐれて語学的な課題であるはずである。しかしながら,原文であるところの漢文(すなわち中国の古典語)を扱う中国語学の専家の視点でなされた研究は極めて少ない。まして漢文学習書となると,藤堂明保・近藤光男『中國古典の讀み方』(江南書院,1956)が藤堂文法の体系(現代語の文法書『中国文法の研究』同,1956がある)で説明したものとして出色であったほか,散文小品アンソロジーも兼ねた小川環樹・西田太一郎『漢文入門』(岩波書店・岩波全書,1957)が今でもよく利用される以外は絶えて見当たらない。

藤堂の『讀み方』は独自の有益な分析を含み,また文法の大枠を把握するには適したが,現実に多種多様の漢文を読もうとするにはきめの粗いところがあった。小川・西田の『入門』は教材の選択など総合的な読本としてはすぐれるが,学習方法としては大正時代から戦前にかけてのベストセラーであった塚本哲三『漢文解釋法』(有朋堂,1917)の枠内にあり,語学的な積極性には欠ける。

ほかの漢文学習書は,総じて「虚字」の説明と「句法」の説明とに終止し,ものによっては,中国語の文法と日本語の文法とが截然と区別されない説明が見られるものすらある。

中国の文語文の文法を説く書物として,筆者が学生時代に注目したのは,楊伯峻著・波多野太郎,香坂順一,宮田一郎訳『中国文語文法』(江南書院,1956)である。これは《文言語法》(北京大衆出版社,1955)が原書であり,さすがに文法の体系がきっちりしていた。俗に,漢文には文法など無い,などという暴論が発せられることもある世界にあって,やっと道しるべを見つけた思いであった。

しかし,邦訳『中国文語文法』には例文に訓読がついていないことのほか(必ずしも短所ではない),原書の文法用語は原文のまま使うという特色があり,語学書としては少しく一般性を欠き,学習書としても流布し得なかった。

その原書《文言語法》は1963年に,例文を精選し,解説文をコンパクトに修訂した新書判の《文言文法》(中華書局)に姿を変えた。文法の体系・用語はさすがに時代の制約を逃れ得ないが,新書判200頁のボリュームに目配りの行き届いた記述が盛り込まれ,今なお魅力を失わない文法書である。そこで,前述したような意図で,これを編訳して研究報告書を作った(1983年第3次印刷を底本に使用)。その際,例文に訓読をそえることはもとより,原書の文法用語は現在の我が国でふつうに行われる用語に翻訳した。

なお,「朝」はなぜ「あさ」と読まずに「あした」と読んできたか,「頭」はなぜ「あたま」と読まずに「こうべ」と読んできたか,「出」は「でる」ではなく「いず(づ)る」,「入」は「はいる」ではなく「いる」と読む理由はなにか,本冊はこのような疑問に答えるべく調査と記述をほどこした。学生生徒の質問に対して,「伝統的にこう読んできたのだ」というだけでは答えにならず,不信と漢文嫌いを助長するだけであろう。教職につくことが多い二松学舎大学の学生諸君には,是非このレベルまで習得していただきたいという微意に出るものである。

報告書編訳の分担として,《文言文法》本文については全て協力者・小方伴子が訳出し,「訓読処理」は佐藤が記述した。小方は我が国で五指に満たない貴重な古代漢語の文法研究者として活躍中であり,小方の献身的な協力を得て,所期の計画通りに研究成果の刊行を見ることができたことに感謝したい。

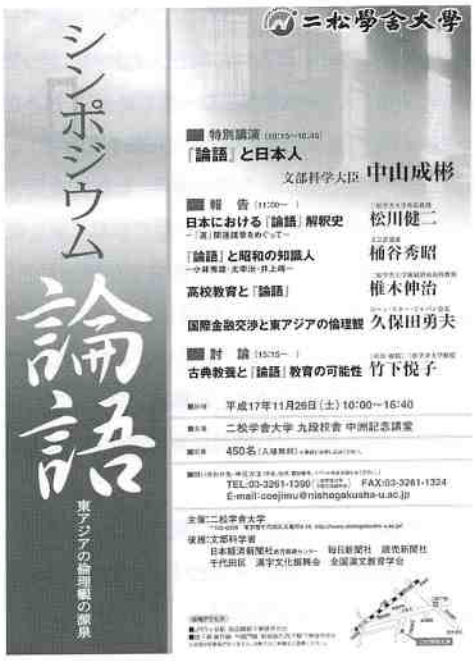
日中文化交流班

主　任：佐藤 一樹
担当者：竹下 悦子
協力者：陳 捷　劉 建輝　戦 暁梅

平成17年度班活動報告

17年度の総括として、まずシンポジウム『論語』を振りかえる。シンポジウムで当初問いかけようと考えていたことは、第一に、数ある古典の中でなぜ『論語』だけが今に至るまで読み継がれてきたのか、その魅力は何なのかということ、第二に、東アジアの倫理観と『論語』の関りについて、最後に、『論語』教育の可能性について、この三点だった。実際のシンポジウムでは、『論語』各章をめぐる解釈について論議が集中し、予定とは異なる展開となった。しかし、それもまた『論語』がいかに深く日本に根付いているかを示すものと考えられよう。『論語』の章句についての解釈の変遷は、日本人の倫理観の形成と不可分の関係にあった。『論語』の日本における受容史は、そのまま日本漢学の歴史を反映するものだが、『論語』にとどまらず、教養としての中国古典、その現代における活用については、改めて問い直し続けていかなければならない。日本漢文学の研究において、日本での『論語』受容とその継承とは重要な課題であることは言を待たないが、それはまた、大学・高校における古典教育、そして日本人の倫理観への新しい可能性の模索へと繋がるはずのものである。ただしかし、それは一回のシンポジウムで取り扱うには大きすぎる問題であったことは確かであり、今後シンポジウム席上でいただいたさまざまなご批判を真摯に受け止め、テーマを絞って如上の問題を一つずつ丁寧に深めていくことが出来ればと考えている。

今年度の研究活動から浮かび上がってきたのは、もうひとつ、漢文によって伝えられた言説の受容や展開を跡づける作業とともに、それとはひとまず弁別した形で、漢文の文体や書籍を中心に伝達媒体としての漢文を考える必要性である。書籍については、中国の王勇教授、王宝平教授が精力的に研究を進め、その成果の一端は、本年9月に浙江で開かれるCOEプログラムの国際シンポジウムで発表されることになっている。それにたいし、昨年9月の近代漢文に関するシンポジウムでも話題が集まった、漢文の文体に焦点をあてた研究は、まだ一定のレベルにまで達していないように思われる。とりわけ、幕末から明治、大正の近代文化の揺籃、および発達の時代に、どのような場面で、どのような人々によって、何を表現するために漢文体が用いられたのか、あるいは、日本語の近代文体の成立に漢文体がどのように関わっているのか、これらの事柄については、パイオニア的な研究成果がいくつか存在するだけで、まだ定まった見解はだされていない。近代言語の定立に同じように取り組んだ中国の例なども視野に入れながら、文学、言語学、歴史学、哲学、さらには社会学や自然科学など、諸分野の専門家の協力を仰ぎながら、近代の学術、文化の成立と漢文体の関係に取り組む計画を立てたい。



書誌学・目録データ班

主　任：高山 節也
担当者：町 泉寿郎　谷本 玲大
協力者：高橋 智　真柳 誠　小曽戸 洋

平成17年度班活動報告

先般ニューズレター4号に中間報告を掲載したが、本号には重複を厭わず16・17年度総括として中間評価以前の最終報告を掲載する。

1．データベース関係

データベースの構築と入力ならびに情報発信は、本プログラムの基本計画であり、最優先企画といってよい。入力情報の最重点は日本漢文文献の所在情報を、各種の目録から抽出したデータとして蓄積し、これを公開することである。現在中国のデータ関係組織に依頼して、65機関約4万件のデータをほぼ入力し終わっている。

さらに公開するシステムの検討、作業もほぼ完了し、平成18年3月1日をもっていよいよ公開に至った。業者からのデータは必須事項をExcelに入力したものであり、これをデータベースに一括して読み込む方法を取っている。現在入力公開に至った資料は、北海道・東北地区とその他の地区の一部であって、日本国内をとってみてもなお未調査・未公開の状況にあるものが多い。これは次年度以降順次充足していく予定である。また各機関の目録記載を転記しているため、記載方法が一定ではなくまた転記上の誤記などもあり、書名・人名等の読み仮名や分類法など、専門的知識を必要とする部分と同時に、細部にわたって改訂作業を実施している。そのため入力は終了していてもなお公開に至っていない資料がかなりの量あることも事実である。これらの状況は可能な限り早急に改善し、公開資料を増加させなくてはならない。

なお国立情報学研究所を通じて公開するシステムや、人文科学研究所の全国漢籍データベースとリンクする検索システムもすでに稼働していることを付記する。

2.和刻本漢籍邦人序跋集成関係

当面は和刻本漢籍を対象として邦人序跋の収集を行うこととした。ただ、本プログラムの趣旨として日本漢詩文のみならず漢文資料全体に研究対象を拡大したことと連動して、和刻本漢籍経部と和刻本漢訳仏典および漢方医書を含めて資料収集を実施してきた。まず漢籍経部については、二松学舎大学附属図書館所蔵和刻本経部全96点を調査し、中から邦人序跋のあるもの35点を得、内閣文庫においては、これまでに経部孝経類まで145点を調査し、邦人序跋あるもの42点を得た。なお慶應義塾大学斯道文庫においても経部漢籍の調査が開始され、経部易類を終了した。なお和刻本経部漢籍については、和刻本漢籍分類目録と対照して相当量の蓄積が実現した段階で、データ入力にかかる予定である。

仏典については、成田山仏教図書館において延べ43日にわたって調査が実施され、叢書子目を含めて延べ1,059点を調査、邦人序跋延べ424点を収集した。さらに他機関調査を続行中で、現在3点の邦人序跋を資料に追加した。

医書については、北里医史学研究部に所蔵する大塚修琴堂文庫（約2,500点）を調査し、これを漢籍・和国本漢籍・準漢籍・日本漢文・和文に類別し、その結果をEAJRSにおいて報告した。

3.日本医家伝の刊行・『日本医譜』の電子テキスト化

現在一応の入力作業を終了した。目下、校正作業をすすめており、校正を終了した巻から順次Web上に公開していく予定である。

4.日本漢文関連業績集成と情報発信

日本漢文学に関連する単行本や論文の総合データの構築と情報発信を目指して、COEプログラム採択当初から継続して作業を進めている。平成18年2月現在の状況は以下の通りである。

論文入力データは、

和文4,093件　欧文22件　単行本　1,295件

なお単行本には漢文教科書298点を含む。

NDL・OPAC雑誌情報記事索引にもとづき、該当論文データを収集し入力すると同時に、和漢比較文学会叢書所収の研究文献目録を入力している。現時点で、データの入力範囲は基本的には奈良時代から室町時代、一部明治時代に及んでいる。

シンポジウム『論語』の開催

事業推進担当者　竹下 悦子

シンポジウム・講習会・公開講座

2005年11月26日、二松学舎大学・中洲記念講堂において、シンポジウム『論語』が開催された。このシンポジウムは、本COEプログラムの近世近代研究班の活動の一環である三島中洲研究会の中からその構想が発案されたものであったが、その後の経緯の中で、大学が主体となる全学規模のシンポジウムに発展した。そもそも「漢学塾」をその母胎とする二松学舎にとって、『論語』を始めとするいわゆる古典を如何にして教育の原点に据えるかという問題は、大学のアイデンティティーを確立する上で軽視する事の出来ない重要な問題であるだけでなく、また本COEプログラムがテーマとして掲げる「日本漢文学」の一つの典型としても、日本における『論語』受容とその継承とは重要な課題であることは言を待たない。その意味で、大学と本プログラムとが連携して、日本漢学の精髄を如何に現在に生かせるかを模索したこのシンポジウム『論語』は、大きな意義を持つものであると考える。

今回のシンポジウムは、「東アジアの倫理観の源泉」というテーマのもとに、各界の代表を報告者にお招きし、日本における『論語』の受容をさまざまに語っていただいた。学術研究の立場からは本学客員教授の松川健二先生に「日本における『論語』解釈史」と題して、主に江戸期の漢学者たちが『論語』里仁篇の「朝に道を聞かば」という句を如何様に解釈してきたのかについて詳解いただくとともに、古典とその解釈について重要な御提言をいただいた。文芸界の立場からは文芸評論家の桶谷秀昭先生に「『論語』と昭和の知識人」と題して、小林秀雄・太宰治・井上靖ら昭和の文人たちが、日本近代という時代を背景に、『論語』と実に多様なかかわりを持っていたことについて語っていただいた。教育界の立場からは、二松学舎大学附属沼南高校の椎木伸治先生に「高校教育と『論語』」と題して、高校における漢文の授業数減少の実態と、その中で独自に科目設定された『論語』授業の在り様についてお話いただいた。実業界からはローン・スター・ジャパン会長の久保田勇夫先生に「国際金融交渉と東洋の倫理観」と題して、東洋と西洋の倫理観が直接ぶつかり合う国際金融の世界で、『論語』を始めとする東洋の倫理と智慧とがどのような意味を持ちうるのかについて、実践の立場からの貴重なお話をうかがった。

また、特別講演として今回は、前文部科学大臣の中山成彬氏をお招きし、「『論語』と日本人」と題して、日本人の教養のもととしての漢学の重要性と、昨今の古典教育軽視の風潮への危惧との、二つの問題提起をいただいた。

報告終了後に会場から質問を集め、テーマを絞った討論を行った。あらかじめ想定した問題として、まず第一に、数ある古典の中でなぜ『論語』だけが今に至るまで読み継がれてきたのか、その魅力は何なのかということ、第二に東アジアの倫理観と『論語』との関りについて、第三に『論語』教育の可能性について、この三点について討論で深めることが出来ないかと考えていたが、『論語』各章をめぐる「解釈」の問題が予想以上に白熱し、特に教育における問題点、その解決に向って論議が出来なかったことは反省点として残った。多数ご参加いただいた高校関係者の方々から、そのことについてご批判をいただき、今後の開催における課題として受けとめたいと考えている。「解釈」をめぐる議論については、あまりに専門的に過ぎるとのご指摘もいただいたが、しかし大学主催のシンポジウムである以上、学問の本質から全く乖離した対象理解は無意味である。高等教育機関としての大学がシンポジウムを主催する意義は、テーマの学術的解明への姿勢あってこそ深まるものではないだろうか。今回のテーマで言えば、『論語』の日本における受容史は、そのまま日本漢学の歴史を反映している。その解釈史は、日本人の倫理観の形成とも切れない関係にある。「解釈」することの意味は漢学の受容史に直結し、そこから古典の意味、教養の意味、ひいては倫理の意味が問い直されるはずである。それは教養としての古典、その現代における活用への問題提起となり、大学・高校における古典教育、そして日本人の倫理観への新しい可能性の模索へと繋がるはずのものである。ただしかし、それは一回のシンポジウムで取り扱うには大きすぎる問題であったことは確かである。先に述べたご批判を真摯に受け止め、今後はもう少しテーマを絞って如上の問題を一つずつ丁寧に深めていくことが出来ればと考えている。
繰り返し述べるが、シンポジウム『論語』の最大の趣旨は、『論語』を始めとする古典を、生きた教養として現代に生かす方法を探ることにある。それは真の教養人を育てたいという建学の精神にもつながるものであり、かつまた多様な価値観に揺れる現代人の、精神の渇望を満たすものとして、漢文学の再認識にも繋がるものではないだろうか。

「訓点資料解読講習会」報告

事業推進担当者　白藤 禮幸

シンポジウム・講習会・公開講座

上記の講習会が訓点語学会と二松学舎大学COEプログラムとの共催で、平成18年2月16・17日に二松学舎大学九段校舎で開催された。この計画は、本学COEプログラムの特任研究員でもある、訓点語学会石塚会長の発案に成るものであった。訓点資料は、日本人が、奈良・平安・鎌倉時代に、どのようにそれら漢籍・仏典を理解したか、を反映するもので、我々のプログラムの課題の内の「日本人の漢文研究」と深い関係のあるものである。また、句読点・返り点・ヲコト点・仮名点が多様な色や形式で付されている訓点資料は、多く奈良・京都の古い寺院の経蔵に秘蔵され、或いは大きな図書館に貴重書として蔵されるもので、必ずしも容易に手を触れることのできるものではない。それ故に、資料への対し方、扱い方、古体の仮名やヲコト点の読み解き方が重要となる。

講習会は、次の日程とテーマで行われた。

16日

・高山節也 二松学舎大学教授「漢文の種類」

・月本雅幸 東京大学教授「仏典訓点資料」

17日

・小助川貞次 富山大学教授「漢籍訓点資料」

・石塚晴道 北海道大学名誉教授「国書訓点資料」

高山教授は、漢籍とは何か、その範囲、また、どのように分類されるか、中国の歴代の史書で、漢籍がどのように分類されてきたか、の変遷をその詳細な系統図によって話された。

月本教授は、わが国での漢文訓読の起こりから説き始め、訓点資料のあり様、訓点語研究の歴史と問題点を提示された上で、具体的に仏典訓点資料を解読する方法を実践的に示され、同時にそれぞれの方法が持つ問題点も明らかにされた。和訓の手掛かりとしての「類聚名義抄」の扱い方、漢字音のための資料についてもその功罪両面、注意すべきことを指摘された。訳文の作成については、東京大学国語研究室蔵「大日経疏」のカラーコピー資料に拠りつつ、「ヲコト点図集」に頼るな、など訓点研究の困難さにも言及された。

小助川教授は、仏典に比べ、漢籍訓点資料が非常に少ないことの持つ意味から説き起こし、漢籍も特定の巻に偏って残っていること、漢籍には中国漢代以来の訓詁学の影響下、注釈書が多く、その影響が漢籍訓点資料にも見られること、また、パソコンをもちいての訓読文の入力についての紹介、さらに、東アジア漢字文化圏での訓読研究として、近年の韓国における盛んな研究活動の状況についての紹介もあった。

石塚教授は、国書の訓点資料として、日本書紀・古語拾遺・延喜式・将門記などのあることを紹介し、中でも日本書紀の訓読、その資料の持つ問題点について論じられた。

本講習会については、昨年10月の仙台での訓点語学会において予告され、訓点語学会や二松学舎COEプログラムのホーム・ページでも紹介され、各地の大学でもポスターが掲示された由で、定員50名のところに、全国各地から、80余名の参加者があった。大学院の学生は言うまでもなく、大学の若手助教授クラスの参加も多く、講習会としても大成功であった。参加者のアンケートでも、この種の講習会を全国各地でもっと頻繁に開いてもらいたいという声が多かった。

また、この度の講習会では、訓点資料については、百聞は一見に如かずで、実物を見る機会を作ることが望まれた。幸い、学士院会員東京大学名誉教授築島裕先生の御好意によって、先生御家蔵の「辨正論巻第三保安四年点」「大毘盧遮那経疏巻第十七寛治二年点」を拝借し、展示することができた。

本講習会は、今後の訓点語学振興のためにも大きな示唆を与えるもので、その場の形成に本学もその役割の一端を担い得たことを喜びとしたい。

COEプログラム公開講座に参加して

COE研究助手　川邉 雄大（二松学舎大学大学院中国学専攻博士後期三年）

シンポジウム・講習会・公開講座

平成17年度、二松学舎大学COEプログラムの一環として、公開講座「文献資料書誌技能者養成」が、ほぼ毎週土曜日の二限目（午前10時40分～12時10分）に、講師1名あたり3回の講義、計6名18回にわたって行われた。

前期は、高橋良政先生（日本大学教授）「和刻本漢籍について－書誌調査と書誌作成の観点から－」（5月7・14・21日）では、主に和刻本漢籍の時代ごとの特徴ならびに唐本との差違についての説明、和刻本漢籍書誌を取るにあたっての留意点を中心に、実際の版本を用いて講義が行われた。

次に鈴木俊幸先生（中央大学教授）の「近世書籍文化の変遷と書誌」（5月28日、6月4・11日）では、「数日間、複数名で某旧家の蔵書を調査する」という想定の下、時間的・資料的制約のある中で、漢籍・国書・摺物といった様々な資料を前に、書誌調査を何に主眼を置いて、いかに効率よくかつ正確に行っていくかという非常に実践的な内容であった。今まで授業や所属する大学の図書館等で行なってきた、時間的・空間的に制約の少ない書誌調査との違いを痛感させられた。またこれまで取ったことがなかった国書の書誌を取ることによって、漢籍書誌の取り方との違いを実感した。

最後に相田満先生（国文学研究資料館助手）の「和刻本漢籍・準漢籍の書誌と情報」（6月18・25日、6月11日）では、国文研におけるデータベース化の現状、国書総目録を中心とした従来の書誌分類方法（特に日本漢文）の問題点等を講じられた。従来の書物形式の目録に代わるコンピューターによる書誌データベースの擡頭と、それに伴う諸問題点について、改めて考えさせられた。

前期の講座を受講して感じたことは、書誌というものは取る人・取る目的に応じて各々大きく異なることである。現在われわれ二松学舎大学COEプログラムで行っている「日本漢文学に関するデータベース」の作成においても、従来の漢籍・国書等の分類方法とは異なった日本漢文学に主眼を置いた特徴ある書誌作成が必要であると感じた。

後期の高橋智先生（慶応義塾大学斯道文庫）「日本漢学者と漢籍の蔵書」（10月1・8・15日）では、我が国平安時代の博士家より鎌倉時代の五山僧を経て、江戸時代初期の林家・同中期の荻生徂徠・幕末明治初期の安井息軒らに至るまでの漢学者の系譜と、読法・訓点の変遷についての講義であった。時間の都合で中国の学術の変遷との影響についての比較に及ばなかったのが非常に残念であった。18年度の講座に期待したい。

次にロバート・キャンベル先生（東京大学助教授）「漢文小説『夜窓鬼談』の世界」（10月22・29日、11月12日）では石川鴻斎に焦点を当て、明治期の漢文と出版・明治の文人たちと清国公使館員たちとの交流についての講義のほか、怪奇短篇集『夜窓鬼談』の中から二篇を選び、時代背景や附随する挿絵に注意しながら読み進めていった。特に時代背景を知るために、当時の列車の時刻表までも駆使する緻密な実証研究の手法は、自分にとって大きな刺戟となった。

最後に小曽戸洋先生（北里研究所東洋医学総合研究所教授）「中国医学書の特徴と変遷」（11月19・26日、12月3日）では、先生ご自身が解読にかかわった馬王堆漢墓出土の医書等を用いて、書物の形式と医書の変遷を語られた。またふだん文学部ではなかなか学ぶことのできない陰陽五行説に基く東洋医学の基本的概念とその変遷、日本における漢方の流入と医者の系統についての講義がおこなわれた。

後期の講座では主に、漢文学者の系譜の変遷とそれに伴う読法・訓点の変化、漢詩文と比べてあまり注目されていない漢文小説、経書等に対する医書といった、自分が所属する中国学専攻ではあまり知ることがなかった分野が中心であり、これらが今後は無視できない存在であることを認識させられた。

1講師あたり僅か3回、という限られた短い時間数であったにもかかわらず、非常に密度の濃い講座であった。また内容も和刻本漢籍・国書・日本漢学・漢文小説・東洋医学書と広汎かつ実践的であり、日本漢文学にかかわる多様な学問領域のひろがりを実感した次第である。

受講生も本学院生よりも他大生（院生）、図書館司書、高校教員、東洋医学関係者の参加が多くみられた。今後は本学の院生が国文学・中国文学という既存の垣根を越えて、COEプログラム・日本漢文学研究により積極的に参加を希望することを望むものである。

王古魯の日本漢学研究

COE海外拠点リーダー　王 宝平（浙江工商大学日本文化研究所）

研究レポート

民国時代（1912～1949）に優れた日本学研究者が続出した。しかし、日本の中国学研究事情に深い関心を寄せ、常にそれを中国へ紹介する努力を払ったのは、王古魯の右に出る者はあるまい。王古魯（1900−1959）、本名は鐘麟、別名は王仲廉、古魯を字とする。金陵大学中国文化研究所専任研究員、北京大学文学院教授を務めたのち、新中国成立後、北京師範大学教授に転じた。彼はイギリスの耽美主義作家を紹介した著書（『王爾徳生活』、上海:世界書局、1929）もあれば、ドストエフスキー（『一個誠実的賊及其他』、上海:現代書局、1929）の小説を翻訳したものもある。しかし、日本関係の業績のほうが圧倒的に多かった。『言語学通論』（安藤正次、世界書局、1930）といった言語学の本や、「鄭和西征考」（山本達朗、『武漢大学文哲季刊』4巻2号、4号）、「六国表訂誤及其商榷」（武内義雄、『金陵大学金陵学报』第1巻第2期、1931年11月）、『塞外史地論文訳叢』（第1輯、白鳥庫吉、商務印書館、1938）等の歴史学の翻訳も見られるが、武者小路実篤『四人及其他』（徐祖正と共訳、南京書店、1931）のような文学作品には最も興味を注いでいたであろう。そのうち、彼が翻訳した青木正児の『中国近世戯曲史』（上海:商務印書館、1936）は、その後、中華書局（1954）、上海文芸聯合出版社（新版、1956年）、作家出版社（1958）から絶えず版を重ねて出版された。

青木のこの本は、確かに王国維の『宋元戯曲史』の後を受け継ぎ、明清時代の戯曲を研究した名著であるが、王古魯の果たした役割も忘れてはならない。彼が逐一原典に当たり、ミスを正し、細かい注をつけ、さらに付録に「国立北平図書館所蔵之蔣孝旧南九宮譜」「蔣孝旧南九宮譜与沈璟南九宮十三調曲譜」「曲学書目挙要」「奢摩他室蔵曲待価目」を入れて、原著より3分の1ほどの内容を増補した苦労は、本書をより学術価値の高いものとして中国で重宝される結果になったのである。本書の翻訳を通じて彼は青木と交わりを結び、それ以来互いに益を与え合い、培われた厚い友情は、王が死ぬまでの終生に及んでいった。二人の交誼は王古魯の青木宛の37通の書簡（『東瀛遺墨』李慶、上海人民出版社、1999）を通じて見て取れる。

翻訳のほかに、王古魯は40年代初頭に日本に渡り内閣文庫・無窮会・蓬左文庫などで中国の小説の収集活動に熱を入れた。『王古魯日本訪書記』（福州:海峡文芸出版社、1986）に彼の小説に関する学問が反映されている。皮肉なことに、王古魯のこれらの訪書活動は、汪精衛政府の支援の下で行われたものの、開花したのは新中国成立後のこと。『古今小説』（馮夢竜著、商務印書館、1947、北京:文学古籍刊行社、1955年再版）、『英雄譜図賛』（上海:華夏図書公司、1949）、『水滸志伝評林』（文学古籍刊行社、1956）、『明代徽調戯曲散出輯佚』（上海:古典文学出版社、1956）、『初刻拍案惊奇』（凌蒙初著、同、1957）、『二刻拍案惊奇』（凌蒙初著、同、同）、『熊龍峰四種小説』（上海:古典文学出版社、1958）は、晩年の彼の学界に対する最後の貢献かもしれない。

ちなみに『王古魯蔵書目録』は最近、鄭振鐸『西諦所蔵弾詞目録』、馬廉『不登大雅文庫書目』等と共に『中国著名蔵書家書目彙刊』（近代巻、林夕主編、北京:商務印書館、2005）に公開された。

王古魯の学殖を存分に披露したのは、『最近日人研究中国学術之一斑』（私家版、1936）であろう。この中国初の日本の漢学研究を取り扱った著書は、学校（第一章）、学術機関及び図書館（第二章）、公私機関（第三章）に分けて明治以来の日本で行われた中国学術研究（Sinology）につき、詳細な資料を挙げながら述べている。本書の第一章第二節特殊学校で「中国学問の研究で著名な学校」として二松学舎、東洋大学、大東文化大学、懐徳堂が挙げられている。二松学舎の項目で「儒教漢学の精神を以って主体を為す」学校の中でもっとも歴史が長いのは二松学舎とし、創立者三島毅を紹介したうえ、1、高等科、2、普通科、3、日曜科、4、詩文科のカリキュラム、そして通信講座、教職員（学長山田準、督学安井小太郎等）、二松学舎斯文会および同会が開いた講座の演題リストを記述した。

本書の第四章では「庚子賠款」による在華文化事業の一部始終を論述し、さらに明治維新以来の日本人の中国学術研究の趨勢を明治初年からの第一期、明治15からの第二期、甲午戦争後の第三期に区分し要領よく付録にまとめた。

王古魯は周作人・銭稲孫等の学者と同様に戦争中に日本側に協力的行為があった人物として必ずしも公正な評価を受けているとはいえない。その人物像のより正確な究明は今後の研究に俟つであろう。

付記　本誌に「中国における日本漢学の研究」という題でその一叢書を書いた。その後、大きく書き直した同題の小論は『日本漢文学研究』創刊号に掲載されたため、今回のテーマに置き換えた次第である。

「日本における仏典の伝入と出版に関する研究」

COE研究員　會谷 佳光

研究レポート

17年度は、16年度に引き続き、江戸時代に出版された和刻本仏典の版本調査と、その成果にもとづく目録の作成、及び個別の版本に対する書誌学的研究を行った。

版本調査は、成田山仏教図書館を中心に行い、昨年十月に完了した。その他、個別の版本研究のため、内閣文庫、東京大学總合図書館・東洋文化研究所、国立国会図書館、駒沢大学図書館、松ヶ岡文庫（神奈川）、獅谷法然院（京都）、曜光山月山寺（茨城）等で随時調査を行った。昨年度からの調査点数は1200点余（子目を含む）にのぼり、そのうち成田山仏教図書館が1075点を占める。なお調査の際には版種の判別に最低限必要な表紙・巻首第一丁表・序跋・刊記等の撮影・複写を行う一方、所定のカードに書誌事項を書き取った後、データ入力を行い、以後の調査に活用して効率化を図った。

当初は、成田山仏教図書館での調査終了後、内閣文庫等での全和刻本仏典の調査を予定していたが、調査が昨年十月までずれ込んだため、あえて新規調査には入らず、目録の作成と個別の版本研究に重点をシフトした。目録作成に関しては、当初の計画では『江戸時代出版和刻本仏典目録』(仮)という解題目録を予定していたが、あまりに煩雑に過ぎて一覧にも不便なため、『和刻本仏典版本略目』（仮）という版本一覧データベースに計画変更した。入力項目は、①整理番号（親目用）、②同（子目用）、③同（黄檗版大蔵経）、④同（録内儀軌）、⑤同（大正新脩大蔵経）、⑥書名・巻数、⑦編著者名、⑧出版事項、⑨冊数、⑩請求記号、⑪匡郭・寸法、⑫界線・字詰、⑬魚尾・版口、⑭版口千字文、⑮版面、⑯版心題、⑰邦人序跋の点数の全17項目を設け、それぞれに詳細な入力凡例を作成して、このデータベースだけでも版種がある程度判別できるよう配慮した。整理番号を五項目設けたのは、用途に応じて並べ替えができるように配慮したものである。なお『和刻本仏典版本略目』の著録点数1200点余は大蔵経一蔵分に満たない分量であり、現時点でははなはだ不完全な目録であるといわざるをえない。今後さらなる調査によってデータの拡充をはかり、最終的には和刻本仏典の総目録を目指す予定である。

個別の版本については、『禅源諸詮集都序』・『阿毘達磨倶舎論』・『成実論』・『達摩多羅禅経』を対象に書誌学的研究を行った。『禅源諸詮集都序』については、「中国における『禅源諸詮集都序』の流伝と出版」（『二松学舎大学人文論叢』第七十六輯）と「日本における『禅源諸詮集都序』の受容と出版」（『日本漢文学研究』創刊号、ともに本年三月刊行）という論文二本を作成し、目録学・版本学の両面からアプローチして、中国における著述から流伝・出版、さらに日本への伝入と和刻本の出版について考察した。また『倶舎論』他二経については未発表ながらすでに論文一本を脱稿した。これは、成田山仏教図書館所蔵の『倶舎論』三点を手がかりに、江戸時代において和刻本仏典の出版が寛文年間にはじまる黄檗版大蔵経の出版といかに密接な関係を保ちつつ行われていたかを考察したものである。これら個別の版本に対する書誌学的研究によって、江戸時代、特に黄檗版大蔵経の出版がはじまって以降、和刻本の版木が黄檗版大蔵経を中心点に移動する事例がまま見られることや、黄檗版大蔵経が各週寺院において実用テキストに採用された結果、その校訂の不備が問題として浮上し、改点・校勘などの処理を経た版本があらたに出版されていた事実などが明らかとなった。

本年度をもってCOE研究員としての任期は満了する。しかしながら日暮れて道遠しで、和刻本仏典の版本調査はまだ緒についたばかりであり、ようやくおおまかな道筋がかすかに見えてきたところである。来年度以降も、本学COEプログラムとの連携を保ちながら版本調査を継続し、江戸時代における和刻本仏典の受容と出版の実態の解明に取り組んでいく予定である。

伊藤忠岱（鹿里）旧蔵漢学資料の整理と研究 ―大田錦城未刊資料を中心として

COE研究員　清水 信子

研究レポート

近世、日本において受容された各種学問の傾向、及び伝播状況等を探究するべく、当時の個人の旧蔵資料の調査、研究という方法から着手してきた。そしてその対象を地方知識人とし、近世後期、医学、漢学、及び蘭学に通じ、郷里信濃を拠点として活動した学者伊藤忠岱（安永七1778～天保九1838。名祐義、号鹿里）の旧蔵資料について調査した。それにより本年度は、「伊藤忠岱書写日本漢文関係資料目録」を作成し、また、忠岱における漢学理解について着目し、その資料の中から忠岱の漢学の師大田錦城の関連資料について詳察した。

一、伊藤忠岱書写日本漢文関係資料目録

伊藤忠岱の旧蔵資料は、約600部1,000冊以上に上り、その多くは自筆の書写資料で、医学資料が最も多く、次いで、漢籍の注釈資料等漢学資料となっている。これらについては、伊藤伯太記『仰継堂蔵書目録』により、書名等蔵書の全容は概観されるが、個々の資料の詳細については判然としない面も多い。そこで、それらの本格的な調査が俟たれるところであるが、今回、その端緒として、医学、及び漢学資料を中心とした日本漢文関係資料について調査した。その選択理由には、旧蔵資料の中でも特筆すべき資料と言える、講義を筆記した講義録即ち「聞書」「記聞」類の存在が挙げられる。それらは、各講説者の学問的態度、方法等学識が如実に示される第一次資料として資料的価値は大きく、各人物を研究する際には看過することはできない貴重なものである。

既調査資料は227点（一点に複数の別資料が所収されている場合もあるため子目数にすると275点。以下各点数に続く丸括弧内同。）で、その概要は、純粋に日本人の著述になる国書が137（178）点、漢籍について日本人が注釈を施した準漢籍が90（97）点、そのうち、医学関係資料は国書126（165）点、準漢籍の医家類21（24）点の147（189）点、漢学関係資料は国書4（6）点、医家類を除いた準漢籍69（73）点の73（79）点となっている。また準漢籍については、経部が51（53）点｛易類15、書類5、詩類5、春秋類2、四書類21（23）、孝経類2、諸経総義類1｝、子部が39（44）点｛儒家類1（2）、医家類21（24）、雑家類2、道家類15（16）となっている。さらに、聞書の数を挙げると、国書の場合、医書に2（6）点含まれるのみであるが、準漢籍の場合、その半数45（48）点を占める。それらの講説者については、大田錦城が26点と最も多く、次いで錦城の子晴軒が9点、忠岱の医学の師吉益南涯が7点となり、その他高野長英、中川修亭等が続く。

忠岱旧蔵資料に残る錦城講説忠岱筆記聞書については、化政期に行われた講義が中心であるため、文政八年に没した錦城の最晩年の言行として注目されよう。そこで、既調査資料の目録整理後、さらに錦城の講義、及び忠岱書写資料の概要を整理し、聞書の具体的内容について考察した。それに際しては、同様の忠岱書写聞書が二点残り、また錦城にはそれに関する著述も残る『大学』を対象とし、その聞書から窺測される錦城の『大学』講義について、その内容、及び著述資料との関係等について検証した。

二、大田錦城『大学』講義とその聞書ついて

錦城の『大学』講義については、その内容の構成・展開、及び引用例等具体的内容が、忠岱筆記聞書と錦城の各『大学』注釈書と同様であることにより、基本的にそれら自著に準拠したものであった。そしてさらに聞書によれば、それらの注釈書以外からも、自著に見える『大学』に関する記述により増補されているため、講義では錦城の各『大学』注釈書の論旨がより具体化されている。よってその講義は、錦城の各『大学』注釈書の読解を補助する一面も担っていたと考えられる。一方、この講義時期は、文政期、錦城の晩年であると思われるため、講説された『大学』の各解釈は、概ね、錦城の中で最終的なものだったと考えられよう。

翻ってその講義録であるこの『大学聞書』を一資料として見た場合、錦城の各著述に見える『大学』に関する見解が包括された形となっている。従ってそれは錦城の『大学』解釈の総集版、もしくは要約版といっても過言ではなく、新たな且つ錦城の最終的な『大学』注釈資料として重視されると思われる。これらに鑑みれば、『大学』以外にも経学を中心に数多く残された忠岱筆記錦城講説の各聞書についても同様にして、今後逐一詳察し、自著と講義との関係、相違等について明確にしていきたい。それにより、錦城の経学はもとより忠岱の理解した漢学、延いては同時代における漢学の動向が窺測されることであろう。

上代の一次資料における用字法と文体の調査と考察

COE研究員　金子 正孝

研究レポート

日本人が漢字漢文を用いて日本語をどのように表記したのか。その工夫の一端を探るため、上代木簡を対象として、その用字法、語序の破格を中心とした文体について調査および考察することを目指している。

当初の計画を簡単に述べる。上代の文字資料には、記紀万葉等の写本の他、一次資料として木簡や正倉院古文書がある。前者は古くから多くの研究がなされてきたが、後者は近年、研究が始まった段階である。木簡には、腐蝕や欠損により字の判読ができない場合があること、断片しか残らず文意の通じない場合があることなどの欠点もあるが、書かれた当時の墨付きが残る第一次の資料であること、日常に使用された日本語の一端を知ることが可能なこと、年紀の記載や出土遺跡よりおおよその年代が判明すること、今後の発掘調査より事例数の増加が見込まれることなど、記紀万葉等の上代文献とは異なる性格を持つ。

そこで、日常に使用された日本語が残されている上代木簡の事例を集め、用字法と語序を検討し、記紀万葉等と一次資料である木簡とを比較・検討することで文献類と日常使用された日本語それぞれの特徴を見出したい。手順としては、集めた事例を試読し、似たような意味を持つ漢字の用法を考察する。その後、多くの字の事例が集まれば、語序の破格を中心とした文体の考察も可能である。以下、本年度に進めた事項と今後の見通しを述べる。

まず、対象としたのは漢文訓読の影響があると考えられる「未」「将」「当」「応」などの再読文字、「不」などの助動詞、「自」「従」などの助詞、「无（無）」などの形容詞、「在」「有」などの動詞で使用される漢字について、以下の手順で事例を集めた。

①奈良文化財研究所「木簡データベース」にて、当該字を検索し、全体の見通しを立てる。

②データベースや出典、調査報告書等より、写真で表記を確認する。（写真の確認できない例は対象から外す。）

③釈文、出土遺跡、遺構番号、写真、出典の解説などの情報をカード化する。

④上述③のうち、写真を除く情報を一覧表にする。

現在は③について約60字を対象に作業を進めた。これらを検討すると事例数が不足している例や木簡の表面の腐食等により文意のとれない例が多かった。例えば、「无」の事例は数百例にのぼるが、「勿」「莫」などのように事例数が数例しかなく、検討できない事例もあった。そこで、同時代の一次資料である「正倉院古文書」を調査対象に加えることとした。

「正倉院古文書」は、木簡同様、書かれた当時のまま保存されてきた一次資料であることに加え、年月日や筆者の書かれた場合が多いこと、木簡より事例数が多い字があること、木簡とは異なる場で使用された日本語（写経所関連の文書、写経時の目録、物の発注の関する文書、紙背に残された戸籍や写経所関連の文書など）の一端が判明することなどの特徴がある。

もちろん、木簡と正倉院古文書は資料の性格が違うことから同列には扱えない。木簡を扱うには、出土遺跡や遺構の状況など考古学の知識が必要である。また、正倉院古文書では写経所の仕組みや写経生の情報、紙背文書での戸籍の研究成果など、幅広い研究成果を取り入れる必要がある。そのため、上代木簡と正倉院古文書の資料を別に作成し、それぞれの結果を比較・対象する必要がある。このような手続きを経ることで、文献類からは明らかにできなかった上代日本語の使用状況の一端が明らかになるだろう。

対象とした字は先に述べた上代木簡と同じである。手順は以下に示す。

①『大日本古文書』より、事例を抜き出す。

②『正倉院古文書影印集成』「正倉院古文書マイクロフィルム」等より、写真で表記を確認する。
（写真の確認できない例は対象から外す。）

③古文書の年月日や種類、筆者など、事例の文書の情報を入れた一覧表を作成する。

この作業は「无」「無」など一部の字で始めたところである。事例数が多いことやマイクロフィルムによる写真確認等で木簡の調査より時間を要することが予想されるが、事例の抜き出しに関しては東京大学史料編纂所「奈良時代古文書フルテキストデータベース」が更新され全巻が全文検索できるようになったことから、うまく活用することで事例の抜き出しに要する時間は短縮できると考えている。以上の作業から集めた事例に、記紀万葉等の先行研究を参考としながら読みをつけ、用法を考察した。

2年目にあたる2006年度は、対象とする字を広げ、引き続き事例を集めるとともに、これらの用法について考察した結果の一部を発表する予定である。また、研究員の任期終了後も以上の作業を続けることで、語序の破格を中心とした文体についての考察も可能であると考えている。

『佛乗禪師東歸集』の基礎的研究 ―伝自筆本と版本の比較を手がかりに―

COE研究員　根木 優

研究レポート

1. 昨年度の研究概要

鎌倉時代末から南北朝初の禅僧・天岸慧廣（一二七三～一三三五）の偈頌集『東帰集』には、いくつかの諸本が現存している。昨年度は『東帰集』の諸本を調査、その本文系統などを明らかにし、また諸本間に見えてきたさまざまな問題について考察することを目標に研究を進めた。以下、これまでに明らかになった点を中心に記す。

（1）版本『仏乗禅師東帰集』の本文系統

これまで『仏乗禅師東帰集』の版本は、元禄十六年版の一種類しか存在しないと考えられてきた。しかし、版本の諸本を比較した結果、跋文に異同箇所が見つかった。そこで現存する版木を調査したところ、該当箇所に埋木が施されていることが分かった。これにより、版本には元禄十六年版に埋木をしたものと、していないものの二種類が存在することが明らかになった。

（2）伝自筆本の原態

伝自筆本は現在、冊子（袋綴一冊）と巻子（一軸）の二つの形態に分かれている。冊子には、作品の途中にやや大きな空白が見られたり、冊子のノドの部分が狭く、極端な場合はノドに文字が隠れてしまう例が見られた。そして、巻子には巻の途中に著者の朱木印が見えたり、等間隔の折り目や綴じ穴らしきものが見えるなどの不自然な部分が見られた。『報国寺文書』三六一「法衣箱入日記」には、明応八年（一四九九）の段階で『東帰集』は「一冊」と記されているため、当時、巻子は存在しなかったと考えられる。これらのことから、伝自筆本はもともとは共紙表紙の冊子（袋綴）で、それが書物の保護など諸事情によって後代に改装され、冊子と巻子の二つに分かれた可能性がきわめて高いことを指摘した。さらに伝自筆本の丁（配列）はその改装時に入れ替えられた可能性があることから、そのもともとの配列について推測した。

版本との比較から、伝自筆本には存在する偈頌が版本に未収録であったり、伝自筆本にない偈頌が版本には存在するという事象が見られた。これは、前述の改装が影響していたと思われる。改装して丁（配列）を入れ替えた際に何丁かが紛失した、あるいは改装前にすでに紛失していたと仮定すれば、これらの事象はうまく説明ができるのではなかろうか。

また、昨年度の調査で、これまで一般に知られていた書誌情報との若干の相違が見つかった。文化庁監修『国宝・重要文化財大全』と『建長寺創建七五〇年記念特別展　鎌倉―禅の源流―』は、巻子本の横の長さを「全長一一五・二㎝」とするが、稿者の調査では「全長二八〇・五㎝」であった。

以上の内容は、和漢比較文学会・東部例会（平成十七年七月二十三日、於学習院大学）にて「『仏乗禅師東帰集』伝本系統に関する一考察―自筆本と版本の比較から―」と題して口頭発表したものに基づく。

（3）資料紹介「重要文化財『東帰集』（伝仏乗禅師自筆）―翻刻と解説―」

「日本漢文学研究」創刊号（平成十八年三月）に、中世五山文学の資料として『東帰集』（伝自筆本。一冊、一軸）の写真と翻刻を掲載し、また若干の解説を加えた。本書は鎌倉時代末から南北朝初めの禅僧・天岸慧廣の偈頌集であり、鎌倉・報国寺に伝わる最善本である。大正十五年に重要文化財に指定され、現在は鎌倉国宝館に寄託されている。本書は冊子と巻子の二つの形態に分かれる。冊子には東京大学史料編纂所に影写本があり、明治期と大正期のものがそれぞれ一冊ずつ所蔵されているため比較的容易に閲覧することができる。しかし、巻子は影写本も存在しないため閲覧がきわめて困難であった。そこに今回の翻刻と写真掲載の大きな意味があると思われる。

2. 今年度の研究計画

今年度の計画としては、前述した『仏乗禅師東帰集』の伝自筆本と版本との比較から見えてきた問題や昨年度の調査報告などを論文にまとめる。また、疑問を残した部分を追求するとともに伝自筆本にのみ収録される偈頌十一篇の訳注に取り組みたい。昨秋、鎌倉・報国寺より刊行された『仏乗禅師東帰集』の訳注本は元禄十六年の版本を底本としているため、伝自筆本にのみ収録されるこれら十一篇については言及がない。そこに、これらの訳注を試みる意義があると思われる。さらに、新出資料として報国寺に所蔵されている『仏乗禅師東帰集』（元禄十六年刊）の版本を調査する。この本は他の版本と異なり、江戸後期と見られる精緻な書き入れ（鎌倉・報国寺住持によるものか）が施されている。その書き入れがいったいどういうものであるのかを明らかにしたい。また、駒澤大学図書館に所蔵される同版本にも江戸後期の精緻な書き入れ（近江・千手寺住持によるものか）があることから、これらの書き入れが具体的に何を示しているのか比較検討することによって、当時の『仏乗禅師東帰集』受容の一端を知ることができるのではないかと考える。

活動・会議一覧

（平成18年1月～平成18年3月）

●シンポジウム等開催

■テーブルスピーチ

開催日	主催等	講師	所属	演題
18.02.21	COE	アンドリュー・ゴーブル	オレゴン大学	漢文古典と天子:花園天皇の歴史認識

■平成17年度（後期）公開講座

（20頁掲載）

●現地調査

■国内調査等

氏名	期間	行き先	主な調査機関
町 泉寿郎	18.02.11	千葉県多古町	米本図書館
吉原 浩人	18.02.27～18.02.28	奈良市	東大寺図書館・奈良国立博物館
吉原 浩人	18.03.06	山梨県身延町	身延文庫
谷本 玲大	18.03.06～18.03.07	京都市	京都大学
小川 晴久	18.03.07～18.03.11	岡崎市、名古屋市ほか	愛知教育大学、名古屋図書館ほか
會谷 佳光	18.03.08	桜川市	曜光山月山寺
吉原 浩人	18.03.14	甲府市	山梨県立図書館

■海外調査等

氏名	期間	行き先	主な調査機関
小川 晴久	17.11.02～17.11.07	韓国	ソウル大学ほか

●諸会議

■推進委員会

第17回	18.01.14
第18回	18.02.15
第19回	18.03.15

■事業推進担当者会議

第16回	18.01.26
第17回	18.02.21

■実施委員会

第42回	18.01.12
第43回	18.01.23
第44回	18.01.30
第45回	18.02.09
第46回	18.02.21
第47回	18.03.02
第48回	18.03.14
第49回	18.03.23
第50回	18.03.30

■編集委員会

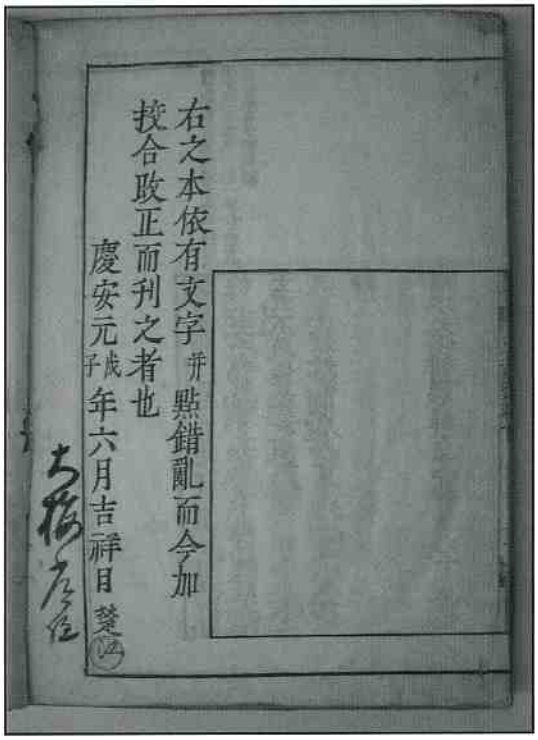
第11回	18.01.07
第12回	18.02.16

平成17年度（後期）　二松学舎大学COEプログラム公開講座

１７年度本プログラムが開催する特別講義等は、日本漢文学研究又は漢文文献の調査・整理に関心を持つ若手研究者及び書誌調査の専門技能者を育成するために開くものです。　対象は学内外の大学院生及び院生レベルの若者を主とし、他にひろく一般社会人等にも、講義あるいは講習等を通じて必要な基礎知識と技能を身につけることを目的としています。

◆受 講 料 ：無 料　　◆対 象 者：学生、研究者、教員、図書館員及び一般の方　　◆会 場：本学九段校舎

番号	講座名		内容	講師	所属	時限等	受講者
1	漢字の文化史		私たちの祖先は、中国産の〈漢字〉を日本語化（音読・訓読）し、〈漢文訓読法〉という独自の読み方を創案した。　この講義では三種類の字書（形・音・義）を通して漢字の諸相を浮き彫りにし、漢字の日本語化の実相を探る。	大島 正二	本学 東アジア学術 総合研究所 客員研究員	木曜 4時限 9/29～1/26 計14回	41
2	江戸の漢詩		江戸時代は、日本における漢詩の“空前絶後”の繁栄期である。260年の江戸時代を、四期に分け、それぞれの時期の代表的な作品を解説し・鑑賞しながら、その発展の様相を見、併せて日本漢詩の独自性が那辺に在るかを考えたい。	石川 忠久	前学長	木曜 6時限 9/29～1/26 計13回	61
3	演習講座	漢籍書誌学	漢籍の目録作成と解題執筆を通じて、漢籍書誌学の基本を学習する。実物を手に取り、版面の比較、調査カードの記入など、実践的な演習を行う。	高山 節也	拠点リーダー 本学　教授	水曜 2時限 10/5～12/7 計9回	6
4		古文書解読	和刻本漢籍・準漢籍に付された日本人の序跋を主な資料とし、ときに書簡・書幅などの肉筆資料をまじえつつ、資料の輪読・解説をとおして、江戸時代の漢文学研究に必要な基礎知識と解読能力を養成する。	町 泉寿郎	本学　専任講師	木曜 6時限 10/6～12/8 計9回	16
5	集中講座	漢字表記論（二）	漢字の書体・字体・字形を定義し、その定義によって明確になる漢字表記の古来からの問題点を解明する（「氏」と「弖」等）。 漢字の字体には、各時代・各地域の標準が存在したことを証明する。	石塚 晴通	COE客員研究員	2/6～9 2・3・4 時限	16
6		江戸の版本（二）	江戸時代文化の基盤として出版文化を考えることの重要性は言うまでもない。その領域や数量という点では恐らく当時世界有数の出版王国であったとも言っても過言ではない。そのような版本の物としての特徴を掴むことに重点を置いた講義を心がけたい。講義は拙著「江戸の版本」の内容に沿って進めることになる。受講前に一読されることを希望する。	中野 三敏	COE客員研究員	12/19～24 2・3・4 時限	18
7	文献資料書誌技能者養成	日本漢学者と漢籍の蔵書	日本における漢学の歴史は、受容と継承が中世とすれば発揚が近世と言えるだろう。しかし、そうした日本の文化を支えてきた漢学はとにもかくにも漢学者によって支えられてきたわけで、漢学者の学問を支えたのが、漢籍という書物であった。書物の無いところから、この学問は発達しなかった。極めて困難ではあるが、学者の学問を支えた書物の実態を知ることは、漢学の本質を探るうえで、欠かすことのできない作業であると確信する。そのような見方を実例をあげながら、解説する。	高橋 良政	慶應義塾大学 （斯道文庫）	土曜 2時限 ①10/ 1 ②10/ 8 ③10/15	17
8		漢文小説『夜窓鬼談』の世界	不気味にも優美な怪奇短編集『夜窓鬼談』（石川鴻斎著、上巻明治22年、下巻27年　刊）を取り上げ、その典拠となった原話と、明治特有の表現と世相とがどのように融 合され、一つの作品に結びついたかを中心に講読していきたいと考えている。開講前　に刊行が予定されている「新日本古典文学大系・明治編」第3巻「漢文小説集」をテクストに用いる。最後の講義時間に試験を行う予定。【参考文献】石川鴻斎著、小倉斉・高柴慎治訳註『夜窓鬼談』（春風社、2003年）	ロバート・キャンベル	東京大学　助教授	土曜 2時限 ④10/22 ⑤10/29 ⑥11/12	10
9		中国医学書の特徴と変遷	中国医学の起源は古く、しかもそれは綿々とした継続性をもって今日に至っている。本講座では、先秦時代から明清時代に至るまでの中国医学書について、書誌形態と思想の両面から、演者独自の見解をもって通説する。また日本における中国医書の受容についても概説する。	小曽戸 洋	北里研究所　教授 （東洋医学総合研究所）	土曜 2時限 ⑦11/19 ⑧11/26 ⑨12/ 3	15


右之本依有文字并點錯亂而今加
校合改正而刊之者也
慶安元戊子年六月吉祥日

魁本大字諸儒箋解古文真寶後集

慶安元刊鼇頭本

編集後記

雙松通訊（そうしょうつうじん） 雙松通訊5号をお届けします。平成16年後期から本格的活動に入りましたが、早いもので中間評価を迎える時期となりました。本号は16年・17年の総括報告であります。全体総括は冒頭の進捗状況報告を、各班の状況はそれぞれの報告をお読み下さい。なお年度末に開催された訓点語学会との共催講習は大変盛会でした。その報告も掲載しました。今後も関連する各種の学会等との連携を推進していきたく、あれこれ計画しております。ご支援ください。（T）

彭城候書画記
『古今公私印記』より

雙松通訊 No.5

発行日
平成18年4月30日

編集・発行
二松学舎大学 21世紀COEプログラム 実施委員会

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
TEL：03-3261-3535　FAX：03-3261-3536

e-mail：coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL：http://www.nishogakusha-coe.net/